

想像物語にみられる達成動機づけの 実験的喚起の効果

林 保* 山内 弘 継** 須藤 亘***

問 題

想像物語の内容分析から人間の社会的動機を測定する試みとして、Murray (1943) による TAT の方法がある。McClelland (1953) は、この TAT 法を適用して、社会的動機のうちで特に達成動機 (achievement motive) を測定する方法を発展させた。この方法を発展させていく過程で、McClelland (1958) は動機を測定する上での基本的な基準をいくつか述べているが、そのうち“動機の測定においては、動機が存在、ならびにその強度の変化が、測定値に敏感に反映されねばならない”また“動機の測定値には、その動機だけの変化が反映されねばならない”という基準を強調し、彼らの測定法がこの基準を満たしうるかどうかを検討するために、被験者の達成動機を実験的に喚起させ、この事態で書かれた想像物語の内容を分析した。

McClelland ら (1953) は、教示と課題達成動機の喚起のための手がかりから、リラックス事態、中性事態、達成志向事態別に被験者群を構成し、達成志向事態にはさらに成功条件、失敗条件、成功—失敗条件の3経験条件を加えた。これら諸事態下で課題を遂行した後に、TAT 法によって想像物語を被験者に書かせ、その内容を分析した。その結果、達成動機の喚起水準の違いが想像物語の内容の違いとしてあらわれ、喚起水準と達成動機が存在を示す内容の量とが対応していた。また経験条件の違いによっても、物語の内容に変化や影響がみられることも明らかとなった。Hayashi と Habu (1962) も、わが国において同様な問題を扱っている。彼らの結果も、達成動機の喚起水準の違いが、想像物語によって測定された達成要求 (n Ach) の強さに対応することを明らかにした。

また、Atkinson (1957) は、達成動機づけ (achieve-

ment motivation) の強さが、動機×期待×誘因の関数として決定されるとしているが、彼のこの理論モデルによると、課題に対する成功期待が異なることによって達成動機づけの強度が違ってくることが示唆される。そこでこの成功期待を実験的に操作して、Murstein と Collier (1952), Murstein (1963), Easter と Murstein (1964) は想像物語の内容を分析した。最初の研究では実験条件の効果が想像物語に有意な影響を与えなかったが、第2の研究では有意な影響が認められた。また第3の研究でも実験条件の効果が認められ、Atkinson のモデルで達成動機づけの強度がより強いとされる実験条件において、想像物語の内容分析の結果が、動機づけをより強く反映する傾向を示した。

さて本研究では、達成動機の測定における基本的な問題について再検討を加えてみることにした。すなわち、被験者の達成動機づけの水準が高まれば、彼らによって書かれた想像物語の内容にそれが反映されるだろう、という予想をたてた、そして従来の研究で示されたように、その傾向が成人だけでなく、児童・生徒においても同様に認められるかどうかを検討した。また、本実験計画にみられるように、同一被験者を再度測定することで達成動機づけの効果を検討する点は、従来の研究方法と異なっている。なおまた本研究では、わが国の児童を対象とする測定図版の試作も意図されていた。

方 法

測定図版の作成 TAT 法を適用して達成動機を測定するための図版は、McClelland (1953) らによってすでに作成されたものがあるが、わが国で特に児童を対象にそれを適用する場合、いくつかの難点が経験的に指摘される。すなわち、刺激となる図版の手がかりの適切性が問題であり、これが子どもの想像物語の内容に特異な偏りをもたらし、そのため達成要求得点を採点する判定カテゴリーの出現率に偏りが現われる。そこで、わが国の

*, ** 京都教育大学

*** 日本生命保険相互会社外務養成課

児童を対象にして達成動機をより適切に測定できる図版が必要となる。まず、児童の日常生活場面を検討し、比較的達成動機を喚起する手がかりを含むと考えられる場面を図版化し、15枚のスライド（モノクロ）を作製した。そして集団法でそれぞれの図版について想像物語を書かせた、測定対象は、小学校5年生から中学校2年生までの児童・生徒1057名であった。各図版について書かれた想像物語を McClelland ら (1953) の判定規準に従って、AI（達成動機づけに関する記述が明確である場合）、TI（達成動機づけに関する記述が明確でない場合）、UI（達成動機づけとは無関係な記述である場合）に分類し、それぞれの出現率を検討するとともに、想像

物語の内容の偏りについても同時に検討した。その結果 FIG. 1 にあげた5枚の図版（京教大70年版）が適切なものとして選ばれ、児童用測定図版として本研究に用いることにした。

被験者 小学校6年生の児童（4校から各2学級）を被験者として選び、最終的に分析資料として利用できたのは232名（男子116名女子116名）であった。

実験条件 実験条件の導入は教示によるもので、達成動機を喚起し、できるだけ動機づけ水準を高めるようにした喚起事態と、特に意図的に動機づけない中性事態とに区別した。また、喚起事態では、達成不安を高めないように特に配慮した。つまり、喚起事態では、2種類の

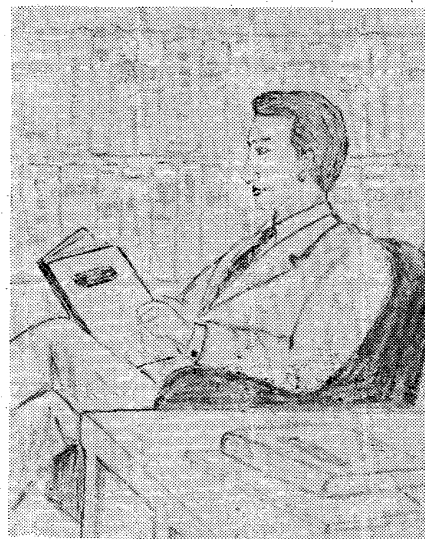
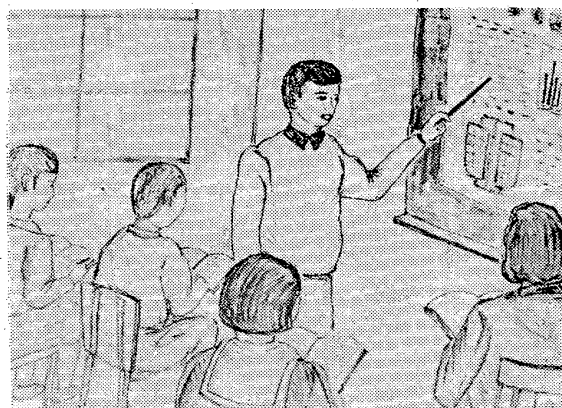
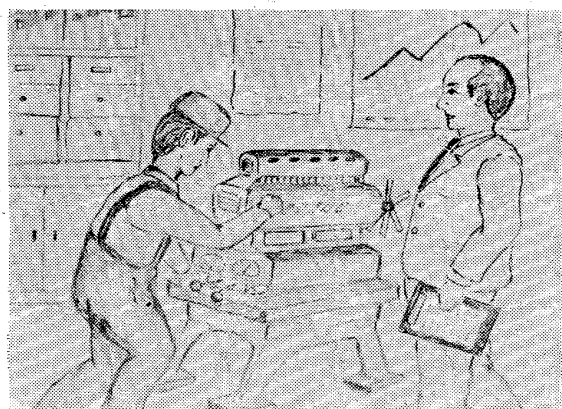


FIG. 1 Five pictures for measuring n Ach.

課題（知的な作業を必要とするもの）を与え、がんばって高い得点を得ることを目標とし、また努力するほど高い得点が得られることを強調するよう教示する。そして達成要求得点の測定は、この課題の遂行直後におこなう。中性事態ではこのような操作をおこなわない。

実験計画 実験は2期に分けておこない、この間隔は約2か月であった。被験者を喚起事態群と中性事態群に分け、第Ⅰ期では両群共に中性事態下で達成要求得点を測定し、第Ⅱ期では、喚起事態群は喚起事態で、中性事態群は中性事態下で再び達成要求得点を測定した、これらの関係はTABLE 1に示されている。

TABLE 1 Experimental Design

	Aroused group N=116	Neutral group N=116
Session I	Neutral situation	neutral situation
Session II	Aroused situation	neutral situation

達成要求の得点化 上述の如き京教大70年版を用いて達成要求得点（n Ach 得点）を測定した。測定は集団で実施する方法をとり、約20秒間スライドで図版を提示し、その後約5分間で想像物語を書かせた。McClellandの判定規準に従って想像物語をAI, TI, UIに分類し、AIには2点、TIには1点、UIには0点を得点として与えた。なおこの得点の重みづけを検討するため、AI, TI, UIの出現率に基づきLikertの方法を適用したところ、ほぼ一致した数値となった。各物語の得点を合計して個人の達成要求得点とした。得点化に際し、2人の採点者が各物語を別々に判定し、各判定を照合して決定する方法をとった。

結果と考察

達成要求得点の分布 第Ⅰ期の中性事態下で測定した達成要求得点の分布は、FIG. 2のようになった。図から明らかなように、得点の分布は正規型ではないが、これは判定規準の性質と測定図版の枚数によるもので、現行

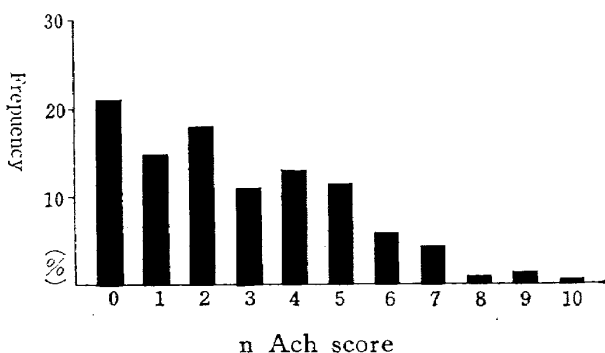


FIG. 2 Distribution of n Ach scores

の方法を用いるならば予想される分布型である。すなわち、AIとかTIと判定される想像物語の数は少なく（AIは16.3%, TIは22.2%）、また想像物語の数も少ないからである。故に、現行の方法によって測定された達成要求得点は、ある臨界水準以上の達成動機水準を測定したものとみなしてよいだろう。従来のほとんどの実験的研究では、達成動機水準を2水準または3水準に分類している程度であるから、この点はそう問題にはならないであろう。

喚起事態群と中性事態群の平均達成要求得点を2期に分けて示したのがFIG. 3である。中性事態下で測定した達成要求得点の平均は、2.7から2.8の範囲であったが、喚起事態下で測定した場合3.4となった。すなわち、中性事態群は第Ⅰ期では2.7で第Ⅱ期では2.8となり、喚起事態群は第Ⅰ期では2.8で第Ⅱ期では3.4となった。

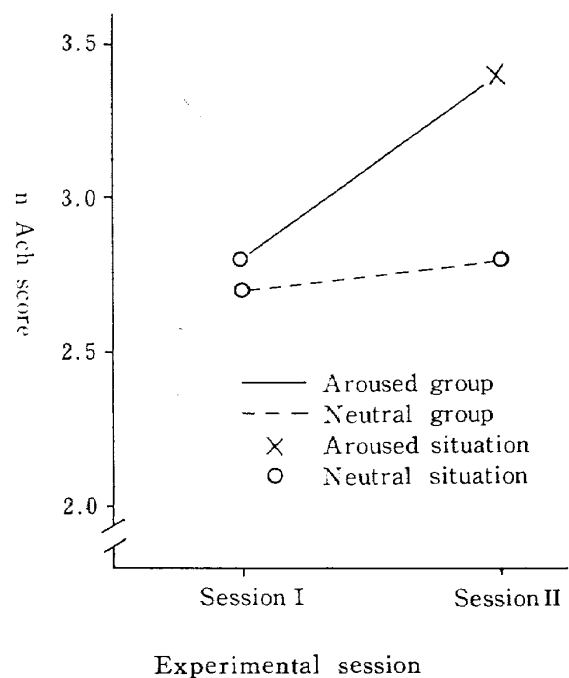


FIG. 3 Mean n Ach scores for each groups under experimental situations

喚起事態の想像物語におよぼす効果 FIG. 3に示されているような測定条件の効果を検討するために、共分散分析をおこなった。分析をおこなうのに達成要求得点の分布を正規化したほうが望ましいので、分析に先だち達成要求得点をT得点に換算した。共分散分析の結果は、TABLE 2の如くになり、教示導入のもつ効果が有意である傾向を示した。F値は5%の有意水準には達しなかったが、測定した内容が想像物語の分析であるので上述の結論を導いた。つまり喚起事態下で測定した達成要求

得点は、中性事態下で測定した場合に比べて、高くなる傾向が明らかとなった。すなわち、達成動機を喚起し、できるだけ動機づけ水準を高めるようにしたところ、想像物語の内容に達成動機づけが含まれるような記述の増大がみられることを示している。ここで、2期の測定において中性事態の場合に達成要求得点に変化したかどうか確かめておく必要がある。平均達成要求得点では、第Ⅱ期のほうがわずかに高い得点を示したが、その差は有意でなかった ($t=0.734$, $df=115$, $.50>P>.40$)。さらに第Ⅰ期と第Ⅱ期の相関関係を級内相関で求めたところ、 $r=.617$ となり、かなり高い相関値が得られた。このことは、両期にわたり達成要求得点の現われが、各被験者においてかなり一貫した傾向をもつことを示している。

TABLE 2 Analysis of covariance

Source	SS	df	MS	F
Situations	187.0439	1	187.0439	3.1524
Error	13587.2160	229	59.3328	
Total	13774.2599	230		

$$F_{.05}(1, 200)=3.89 \quad F_{.10}(1, 200)=2.73$$

達成動機水準との関係 想像物語におよぼす喚起事態の効果は、達成動機水準の個人差によって違うかもしれない。この点を検討するため、第Ⅰ期で測定した達成要求得点の分布に基づき、高水準群 (H群)、中水準 (M群)、低水準群 (L群) に被験者を分類した。分類の基準は、T-得点で45以下をL群、55以上をH群とし、その中間をM群とした。n Ach 得点で示すと、H群は4以上、M群は1~3、L群は0である。各水準がもつ心理学的特質がまだ明らかでないうえに、測定上の限界なども考慮される点から、各水準群別に分析をおこなうことにした。

まず第Ⅰ期から第Ⅱ期への達成要求得点の変化値の平均を求め、喚起事態群と中性事態群の間の変化値の平均

の差を検定し、また同時に各群の第Ⅰ期と第Ⅱ期の得点の差も検定した。その結果はTABLE 3の如くである。第Ⅰ期から第Ⅱ期への得点の変化は、実験事態にかかわらずなく、H群では低くなり、M群とL群では高くなる傾向を示した。H群で低くなったことについては、まず測定上の限界を考慮しておかねばならないだろう。つまり、限られた想像物語数のなかからさらに高い得点を得ることは、高得点者にとって困難である。故に高得点を維持しているかどうかという意味で、n Ach 得点がどれだけ低くならなかったかという点を検討することがむしろ重要になるだろう。検定の結果、喚起事態においても中性事態においても、得点の有意な減少はみられなかった。また両事態間の減少傾向にも有意な差は認められなかった。すなわちH群では教示導入による喚起事態の効果を示す証拠が認められなかった。次にM群の結果を検討すると、得点が高くなる傾向について両事態間に有意な差は認められなかった。しかし中性事態では第Ⅰ期から第Ⅱ期への変化が有意でなかったのに対し、喚起事態では有意であった。このことは、明確でないにしても喚起事態導入の効果を示唆している。L群になるとこの効果ははっきりと認められる。すなわち、両事態間に有意な差が認められ、また喚起事態での得点の変化も有意であった。ところが中性事態でも得点の変化が有意である。故にL群では、教示導入による効果のほかに、得点を高めるような再テストの効果がみられたと考えられる。

これらの結果から、達成動機水準と教示導入による喚起事態の効果との関係は次のように要約できよう。すなわち、喚起事態を導入することによる効果のあらわれは、達成動機水準が低いほどはっきりする。さらに、達成要求得点の高まりには、喚起事態の効果のほかに再テストの手続きによる効果がはたらき、実際の得点の変化にはこれら2つの効果が影響している。喚起事態の効果は達成動機のL水準からM水準まであらわれるが、再テストの効果はさらに低い水準にしかあらわれず、L水準で認められた。

要 約

本研究の目的は、McClellandが指摘した動機測定の基準、すなわち“動機の測定では、動機が存在するか否かとか、その強度の変化が、敏感に反映されねばならない”および“動機の測定では、その動機だけの変化が反映されねば

TABLE 3 Mean Variation Scores of n Ach from Session I to Session II for Three n Ach Levels.

Level (n Ach score)	High n Ach (more than 4)	Middle n Ach (1~3)	Low n Ach (0)
Aroused	-.27 $t=0.656$ $df=40$ NS	+.91 $t=3.719$ $df=53$ $p<.001$	+1.38 $t=4.242$ $df=20$ $p<.001$
Neutral	-.67 $t=1.703$ $df=42$ NS	+.76 $t=1.946$ $df=45$ NS	+.56 $t=2.337$ $df=26$ $p<.05$
t test	$t=0.782$, $df=82$ NS	$t=0.489$, $df=98$ NS	$t=2.101$, $df=46$ $p<.05$

ならない”という2つの基準に従って、実験的に達成動機を喚起した場合に想像物語の内容に変化が生じるかどうかを検討することである。

被験者は小学校児童232名で、各児童は約2か月の間隔においてTAT形式による達成動機の測定を2回うけた、実験条件は教示で導入し、達成動機を喚起する喚起事態と中性事態とした。第Ⅰ期では、全被験者が中性事態で想像物語を書き、第Ⅱ期では半数が中性事態で（中性事態群）、残りの半数が喚起事態で（喚起事態群）想像物語を書いた。

想像物語の内容からMcClellandらの判定規準に従って達成要求得点を求め、喚起事態導入による効果を分析した。両事態群の第Ⅰ期から第Ⅱ期への平均達成要求得点の変化を共分散分析したところ、条件導入による効果が有意であることが認められた。すなわち、喚起事態を導入することによって想像物語の内容に達成動機づけを示す記述内容が増大した。さらに、この効果のあらわれを達成動機水準との関連において検討するため、高達成動機群、中達成動機群、低達成動機群の3つの群に分けた。測定上の制限などが考慮されねばならないが、全体的にみて達成動機水準が低いほど、喚起事態の効果による影響が大きかった。

また、わが国の児童を対象とする達成動機測定用の図版を試作することもできた。

文 献

Atkinson, J. W. 1957 Motivational determinants of

risk-taking behavior. *Psychol. Rev.*, 64, 359—372

Easter, L. V. and Murstein, B. I. 1964 Achievement fantasy as a function of probability of success. *J. consult. Psychol.*, 28, 154—159

Hayashi, T. and Habu, Kaoru 1962 A research on achievement motive: An experimental test of the “thought” method by using Japanese students. *Jap. Psychol. Res.*, 4, 30—42

McClelland, D. C., Atkinson, J. W., Clark, R. A., and Lowell, E. L. 1953 The achievement motive. New York: Appleton-Century-Crofts.

McClelland, D. C. 1958 Methods of measuring human motivation. In J. W. Atkinson (Ed.), *Motives in fantasy, action, and society*. Princeton: Van Nostrand.

Murray, H. A. 1943 Thematic Apperception Test Manual. Cambridge: Harvard University Press.

Murstein, B. I. and Collier, H. L. 1962 The role of the TAT in the measurement of achievement as a function of expectancy. *J. Project. Techn.*, 26, 96—101

Murstein, B. I. 1963 The relationship of expectancy of reward to achievement performance on an arithmetic and thematic test. *J. consult. Psychol.*, 27, 394—399

(1971年9月10日 原稿受付)